短歌

河分武士
澤　絢子　選
宮本照男

特選

ふるえつつ「死にたくない」とう児の涙
胸に刺さりて眠りにつけず

高宮町　細田　惠貢子

（評）連日ウクライナの惨状が報じられ、幼い少女の「死にたくない」の画像に心を奪われ、この歌が生まれたのだろう。惨状に対する憂いと犠牲者に寄り添う心があって、下句の言葉となった。一日も早い停戦が待たれる。

特選

春来れば会える気がする亡き父に
味噌の香あふる木の芽田楽

大藪町　外村輝夫

（評）視覚臭覚を通して亡父への想いが伝わります。結句の体言止めがとてもいい。初句から中七までを木の芽田楽にズームインするかのような流れで名詞の使い方が効果的。

特選

雪のなか過疎地をめぐる宅配便
孫のようなる娘が担う

長浜市　勝木珠緒

（評）発注すれば三百六十五日、指定通りの時間や場所に商品が届けられる便利な現代。過疎地の雪のなか、孫のような娘が健気に社会を支えている姿に、作者は深い慈愛と労いを寄せている。視点が良く温もりにあふれた秀歌。

入選

秋野菜作るばあさんほめよれば
企業ひみつと高笑いする

長浜市　野口成人

（評）秋の野菜畑に、出来の良い野菜を、「どうしたらそんなに上手に育てられるの」と誉めてみたところ、すかさず返った返事は、「企業秘密よ」と、くったくもなく高笑いしたという。間合いとユーモアが読者を引き付ける。

入選

水仙の白と香りのたちこめる
芹川沿いに希望のひかる

芹川町　日比野美鈴

（評）ふだんの川沿いではなく芹川の持つ特有の思いや感情が入り込んで一首を味わいふかくしている。ありきたりな、型どおりの表現を安易に使わないようにことばの選択が適切か否か推敲を期待したい。

入選

ありし日の夫の指形の名残なる
帽子のくぼみに指をふれたり

東近江市　平田三栄子

（評）亡きご主人様の愛用の帽子のくぼみに焦点を絞り、切々と詠い上げられた一首。水に投げた石の波紋のごとく、お顔やしぐさ・日々の生活、貴い思い出へと余韻が広がる。練り抜かれた表現が、読者の心にも詩情を漂わす。

佳作

頂きし「觀世音菩薩傅」いくたびも
読み返しおりコロナ禍の日々

犬上郡甲良町　村岸　千鶴子

佳作

追ひかけて母のとどけし傘二本
登校班に小雪舞ひ初(そ)む

小泉町　磯　史郎

佳作

「じいちゃん」と呼ばるる度に返事する
呼ばるる度のささかやかな幸

正法寺町　髙井　豊

佳作

巣ごもりを温泉パックの湯に憩う
今日は白浜明日は別府へ

本庄町　田口洋子

佳作

たっぷりと歳月を抱く食器棚
ウェッジウッドの皿置いてみる

東近江市　坂口靖子

佳作

夫逝きて残しし畑を友にして
野菜に語り今日も過ぎゆく

開出今町　西﨑　八重子

佳作

春の水静かに湧けり生くるごと
泉の底は砂のおどりて

中藪町　山川美江

佳作

子等使いし国語辞典は手放せず
漢字ナンクロに知恵絞るなり

犬上郡多賀町　木村正子

佳作

吹雪く日の籠もるひとりの夕べなり
声大にして正信偈唱ふ

日夏町　寺村享子

佳作

誰一人巣立ちゆく子を見送れず
学舎に立つ「祝卒業」

犬上郡豊郷町　田中マサ子

佳作

夫逝きて空き部屋いくつ闇の中
パントマイムの洞ろな夕べ

日夏町　石原　不二子

佳作

駄菓子屋も自転車屋等も消えし街
福祉のバスが目につくばかり

米原市　西尾　辰之

佳作

コロナ禍に全てのものの価値問われ
審美眼の研ぎすまさるる

東近江市　村田　淳子

《総評》

三年目となるコロナウイルスの感染は依然として収まる傾向がないので、不安な日常が続いております。そんな中で、応募作品の数はやや減少が見られますが、テーマは時事詠や生活詠など個性溢れるものがあり、読み応えのある作品が多くあり、選考には時間をかけて何度も読ませていただきました。

語数を限られた定型詩、短歌の三十一文字の中には物語があり、根底に深い抒情が流れているから人の心を打ちます。力を得るのはその一語その一音が丹念に推敲を重ねているからです。言葉が機械化し、心が淡くなる世に、宝石のように輝く歌をつくるためには丁寧な推敲が大切になってきます。

河分　武士

初めて選歌をさせていただき、皆さまの詠草より多くを学び短歌の魅力を再認識できて感謝しています。

応募作品には、彦根および近隣の歴史や自然、暮らしや絆が多く詠われており、皆さまが地域を愛し誇りとされていることに感銘を受けました。次いでコロナ禍を乗り越える生き方やロシアの侵攻の終息を願う切実な叫びが多く、このような時事詠こそ社会を良き方向に導くと確信しています。今後も皆さまが短歌を心の糧としご健詠され、この文芸の輪がさらに広がり発展しますようご祈念申しあげます。

澤　絢子

今年もたくさんのよき歌、おもしろい歌、胸に迫る歌に出会え嬉しく思います。コロナ禍やウクライナ情勢を詠まれた歌もありました。一方で普段の生活で目にする彦根城や伊吹山や散歩道の風景に心をよせ暮らしや営み、高齢化に伴う心身の変化にはあまりくよくよせず前向きに生きてゆこうという静かなる意思を感じさせるものがあり励まされる思いでした。たくさんの応募をありがとうございました。

宮本照男

選者吟

眼閉ずるも川の流れの音止まず
ひかりは音無く人を射抜けり
河分武士

車中にて参院選を論じいる
高校生に朝の陽注ぐ
澤絢子

埋れ木の狭庭のほそき一輪は
眼差し高く花の生涯
宮本照男